
日常老齋

呉武鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常奇譚

【Nコード】

N6909I

【作者名】

呉武鈴

【あらすじ】

捜査第零課…それは裏社会の捜査を専門にしている警察署内の秘匿部署である。…まあ、お堅いやツは抜いて彼等とそれを取り巻く人達の日常をお届けします。（本編である『生骸屍肉』とは時系列がバラバラなので、本編に出てきていない登場人物も出てくることがありますがご了承ください）

依頼く鯛焼き

季節が春から夏に変わり始め、町では適度に保温性があり風を通しにくい服装から熱を逃がし易く通気性に秀でている服装に人々が替え始めていたが、とある探偵事務所にいた男―笠羽亨はそんなの俺には関係ないと主張するように黒のスーツ姿をしていた。

「…暑い」

机の上にだれているがこれでも事務所の所長である。コンコン

「ど〜ぞ〜」

だるそうに言われてから約2秒後、黒く長い髪を後ろで一つにまとめたいわゆるポニーテールをした黒い瞳をした少女―柳葉忍がはいってきた。

「おはようございま〜す」「おう、31分23秒遅刻だ」しかし彼女は亨の言葉なんて少しも気にする様子もなく自身の定位置である部屋の真ん中にあるソファに座った。

そのまま数分たってから沈黙に耐えかねた亨は忍を見据えた。

「なんで遅刻したんだ？」

「仕事見つけてきたからよ」

「おっ、流石は忍だな。でどんな仕事だ？」

「いなくなつた娘を探してほしいとのこと」

途端に顔をしかめ何か呟くとそのまま忍に背を向けてしまった。

「…悪いが依頼主に断わりの電話いれといてくれ」

「なんで受けないの？」

「人探しの依頼はいつもろくな事がないからだ」

亨が今まで関わった人捜しの仕事で一波乱起こらなかったことはなかった。例えば（忍経由で）家出少年を捜してほしいと頼まれた時は十数人のチンピラに囲まれたり（全員返り打ちにしたが）、ヤクザの若頭を捜してほしいと（これも忍経由で）頼まれた時は他の組との抗争に巻き込まれそうになったり、ろくな事がなかった。

「ちなみに報酬は弾むらしいよ」

椅子にもたれて足を机の上に投げ出して行く気を全くみせなかった亨は忍の言葉に反応し動きが止まり何か呟くと立ち上がり部屋と違い整理整頓が行き届いていない机の上にあるはずのボイスレコーダーを探し、机の下にあったのをポケットに押し込むと口を開いた。

「…ちよつくら出掛けてくる」

「何処に？」

「依頼主の家にだ」

「金に目がくらんだか…」

「只今戻りました…ってあれ？忍さん、享さんは？」

享が事務所を出て約20分後。両手に茶色の紙袋をぶら下げた給仕服―今風に言えばメイド服を着た住み込みで働いてる少女―桐野雪奈が帰ってきた。

「亨なら仕事に行ったよ」「せっかく両義屋の一日50個限定抹茶餡タイヤキ買ってきたのに…」

雪奈はがっくりしあからさまなため息をしたが忍は少し考えた後に逆に薄く笑った。

「…食べちゃおうか」

「いけませんよ。これは亨さんに頼まれて開店一時間前から場所取りして買ったものなんですから」

「全部食べちゃえば問題ないって」

「いえ、そうゆう問題ではなく…」

「何より亨が帰って来るのは早くても夕方だから鮮度が落ちてせっかくのタイヤキを美味しく食べることが出来ない。そんなのを亨に食べさせるなんてねえ？」「うっ…！」

以前煎餅を買ってきたときちよつど亨が仕事に行っていたので帰ってくるのを待っていて一緒に食べようとしたが湿気てしまい、ふて寝してしまったことを雪奈は思い出した。

「そ、それはちよつと…」「ね？だから食べちゃお」「…でも」

「覚悟決めなよ」

忍はいつの間にかタイヤキを頬張りながら雪奈にタイヤキを眼前に突き出した。「あうう……」

右手を伸ばしながらも、左手は右手を必死に押さえ付けていたが、理性が本能（食欲）に勝てる訳もなく最終的には両手にタイヤキをもっていた。

「やっぱり美味しいねえ」「出来立ての上に抹茶は新芽を使つてますからねえ」ガチャ

「わわわ忘れ物……つてああ……!？」

「はむはむ……いきなり帰つてきてはむ……何叫んでんはむ……ゲホゲホ!？ゆ、雪奈ちゃん!ちよ、お茶!ちようだいお茶!」

「え……あ、はい!はもはも……ゲホゲホ!？きよ、亨さん!ゲホお、お茶ください!」

「お、応——つてまでこらあ!」

机の置いてある湯飲みに備え付けてあるポットのお茶を注ぎ二人に渡したところで最初に叫んだ理由を思い出した亨はまたも叫んだ。

「ぶはあ……」たく人が死にそうな時に何叫んでんのよ」

「自分の心に聞いてみる!」

忍は胸に手を当てて数秒考えた後何か閃いたように目を見開いた。

「ごめん!前に机の上に置いてあった饅頭食べた!」「あん時の犯人デメエだったのか!」

「あれっ!？知らんかったの?」

「俺はてつきり雪奈が捨てたのかと思つてたわ!」

「うわ……言い損だ」

「それより今言うことあんだろうが!」

「もしかして両義屋の一日50個限定抹茶餡タイヤキを食べてたことですか?」

後ろから恐る恐る雪奈。

「さすが雪奈。わかつてんな」

「ずるいずるい……!なんで雪奈だけ誉めんのよ……!」忍のときとは

違い怒鳴らずいつもどおり雪奈に話す亨に子供のように手足をバタバタさせながら抗議をした。

「誉めてねえよ。どうせお前が雪奈をうまく言いくるめて盗ったんだろうが」

「…違うもん！」

「じゃあ今の間はなんだ？」

「凶星だったことに動揺して思考が一瞬飛んだ証拠」

「自覚してんじゃねえか！」

とりあえず忘れ物持つて依頼主のところに早く行けつてゆづ話だが今の亨にとっては依頼く両義屋のタイヤキなのであった。

銀行強盗に遭遇したら？ ～笠羽亨の場合～

「現在犯人グループは人質をとって銀行に立て籠っております。さらに『逃走用の車』を要求しており応えなければ人質を一人ずつ殺すと言っております」

白昼、都市部にある銀行にて起きた事件の中継を見ながら所長のいない事務所で二人の少女が煎餅と茶をいただいていた。

「怖いですね」

「まあ私たちにとっては他人事だけどさ」

「テメエら妙な真似はすんなよ！」

そう言いながらライフルを人質に向けている犯人の一人をみながら笠羽亨は（銀行強盗なんて下らない真似してる馬鹿共に言われたいねえよ）などと考えていた。

―遡ること20分前

夜逃げした債務者を捕まえてくれと『知り合い』から依頼された亨は、まず『知り合い』が口座に振り込んだ必要経費を落とすために近くにあった銀行に入った。カウンターにある番号札を取り、印刷されている番号と現在の番号を確認してまだ時間がかかると判断し五人掛けの椅子に座ろうとしたとき。

「金寄せ！！」

目の前で覆面を被った数人の男がカウンター越しに係員に拳銃をつきつけて大声を上げた。何が起ったか状況を理解出来なかった客達が一瞬静まりかえったがすぐに強盗がいると認識して亨と強盗グループ以外がパニックを起こした。

「黙れえ！静かにしろお！！」

一番背の高い犯人が天井に向けてライフルを発砲すると同時にシャッターが降りた。どうやら店長が警報スイッチを押したらしい。その事を察した犯人が怒鳴りながら奥に向けて発砲する。

そして犯人は

「テメエらは人質だ！！全員隅で大人しくしてろ！」と今日一番の声で叫んだ。

そして現在に戻る。

外では警察が説得に当たっているのかお決まりの台詞が聞こえてくるが誰も耳を傾けてなどいない。

（つまんねえな）

そう思いながら亨は状況を確認する。

犯人は目の前にいる二人と金をとるために奥に行った二人、そして警察に脅しをいれているのが一人と合計五人。装備はそれぞれが拳銃を所持しており五人中三人がライフルをもっている。人質は自分を合わせて九人。自分の所持品は携帯電話が二つ、スタングレネードが三つだけ。

（まあコイツら素人臭いからどうにでもなるか）

そう思いながら隣にいた青年にある伝言を伝えて行動に移した。

「スマンがトイレに行きたいんだが」

「しょうがねえなあ」

そう言いながら一人がトイレまで誘導してくる。

「妙な真似は…」

「分かってるよ。素手と銃じゃどっちが強いかわかるよ」

「そりゃそうだー」

しかし犯人の言葉は最後まで続かなかった。振り向くと同時に亨が首を掴み銃を思いっきり捻って奪い取ったので声を出すことも発砲

することも出来なかった。

「でもなあ、近距離で素手^{こっち}が先手をとれば勝ち目があるんだよ」

抵抗しようと両手で亨の腕を掴むが一寸も動かない。そのうち犯人の力が弱くなり最後には完全に意識が落ちた。

ブルルルル…ブルルルル…

「おい！携帯電話は切つとけ！」

「すみません」

携帯電話の着信を切ると同時に青年は可能な限り大きな声で叫んだ。

「伏せて！」

「は？」

その言葉と同時に人質は誰一人躊躇わず伏せる。突然の奇行に犯人は啞然とする。人質が伏せると同時に後ろで物音がする。振り向けば缶ジュースのような物体が転がっていた。しかし缶ジュースとは違いプルタブの代わりに突起がついている。そのことについて疑問に思った直後、それが強烈な光と音を発した。

「——！？」

突然のことに体を前屈させながら犯人は思った。

「スタングレネード！？」

そう思い一体誰がこんなものを使ったのかと思いながら後頭部に衝撃を喰らい意識が遠のいた。

「あ、進展があつたみたいです。今、中で強烈な光が発されました」

「今のつて…」

「ハハハ…」

「——体なんだよ！？」

そう思いながら奥にいた二人は戻ってきた。

通常の警官がスタングレネードなど持っている訳などないから特殊部隊でも来たかと思ったが仲間の一人がこちらに向かって水平に飛んできたのを見て違うと感じた。

「あ、今犯人の一人が出てきました。何やら慌てて…あつ、中から誰か…スーツの男性が…犯人の襟首を掴みそのまま中に戻っていきましました」

「…すみません」

「雪奈ちゃんが謝ってもしょうがないよ。それより犯人達の無事を祈ろう」

「…そうですね」

井波樟葉觀察記錄

「ふと思ったんだが、いつも樟葉は捜査第零課（こ）に来ないで何してんだ？」

日比野の発言に捜査第零課の全員が―増田はプラモデルの塗装を、ミクは雑誌をめくる手を、劉玄はPSPを操作する手を、それぞれが止めた。

「…確かに…気になるね」

「気にはなりますが…知りたいとは思いませんね」

ミクと増田は返答するが、いつもうるさい何故か劉玄だけが発言をしない。

「…まあ、どうでもいいこー」

「お前ら、今すぐ支度をしろ」

あまり反応が良くなかったので話を切ろうとした日比野の言葉を劉玄が遮る。

何事かと思って劉玄を見れば彼はなんと面白そうな顔をしていた。それだけで全員が気づいてしまった。樟葉の日常を本気で覗くつもりだと。

「…マジでやるつもりですか？」

「当たり前じゃ！上司たるもの部下のことを知らんでどうするか！？」

「いや、プライベートは知らなくてもいいー」

「増田！早速カメラ盗聴器を部屋に仕掛けに行くぞ！」

「イヤですよ！見つかったら間違いなく僕が殴られますからね！」

「バレなきゃいいんじゃない？」

「人権侵害はいけないとおもー」

「細かいことは気にするな！将来禿げるぞ」

「細かいくないです！」

こうなったら誰も劉玄を止めることは出来ない。今までの経験から

それを悟った日比野はまだ文句を言ってる増田の肩を叩きながら「諦める」と言った。

「調査から一週間：樟葉から音沙汰無しということは結局バレなかったというわけじゃ」

「まあアイツのことだから見つけても無視してる可能性が高いですけど」

重々しく喋る劉玄の横面倒そうに日比野が回収してきたカメラと盗聴器をテレビに接続していた。

「課長、セッティング終わりました」

「こつちも用意できました」

給仕室から大量の菓子とそれぞれの湯飲みを両手で支えながらミクが出てきた。「映画見るわけじゃないんですから必要ないんじゃないですか？」

「かの有名な探偵、竜〇も大量の菓子を食べながら監視カメラの映像を見てたんじゃ」

「…さいですか」

既に無駄と学習した増田がさっさと折れてポップコーンを手に取りながら再生ボタンを押した。

一日目

07:00―台所

『うゝ、頭痛い…』

『知るか』

『水ゝ、もしくは酒、ちようだい』

『自分でやれ』

二日酔いなのか頭痛を訴えながら寝室より出てきた樟葉に朝食の用意をしていた少年が律儀に反応した。ちなみに少年は相変わらず黒の帽子を被ったままである。

「…普通ですね」

「この時間なら〜間に合いますよね〜」

「てつきり昼過ぎまで寝ていると思っていたんだが…」

「意外と生活リズムは狂つとらんようじゃな」

07:30―台所

『水に浸けとけよ』

『分かつてるわよ』

先に食べ終えた少年が一言言ってから食卓を離れ別室に向かった。
ゆつくりと朝食を食べる樟葉は井が空になると脇に置いてある二つある炊飯器の中から可能な限り白米を井に移している。その合間にも器用に三匹目の魚を箸で捌いている。

「朝からあんなに食べるんですか…」

「…太りそう」

「そんなことよりアイツは何しにいったんじゃ？」

「どうやら浴室に行ったようですね」

07:32―浴室

『……』

黙々と洗濯機から洗濯物を取り出し軽く皺を伸ばしながら籠に入れていく少年がいた。

「……」

「…少年くん、偉いね〜」「…まさか家事、任せきりなのか？」

「そんなことはどうでもいい。樟葉が何をしとるか見せんかい」

07:40―台所

『…味噌汁おいしー』

そんなことを言いながらまだ朝食を食べてる樟葉は井に味噌汁を入れて飲んでいた。

「本当にどれだけ食べるんでしょうか？」

「これゝホントに朝食ゝ？」

「晩飯でもこんなには食わんだろ」

「これでは調査が進まん。早送りせい」

08:30—リビング

パジャマから着替えていない樟葉はそこらじゅうに積んである本から一冊抜き取るとベランダの窓にもたれて読み始めた。

「何を讀んどるんじゃ？」

「一時停止、拡大してみます」

「これは…『菊と刀』だな」

「意外とゝまともな物を読んでるんですねゝ」

「んなことはどうでもよい。次の行動まで早送りじゃ」

10:00—玄関

「じゃあ、留守番よろしく」

「へいへい」

私服に着替えた樟葉は少年に留守番を頼むと意気揚々と外出をしてしまった。

「…これは盲点でした」

「ずっと家でごろごろしているとゝ予想してましたからねゝ」

「どうするんですか、課長」

「どうせ今日だけじゃろ、帰ってくるまで早送りせい」

23:40—玄関

『ただいま』

結局樟葉はその日、深夜に帰って来て、何事もなくシャワーを浴び、就寝した。

「一日目は収穫無しですね」

「しょうがないよ」

「二日目以降に期待か？」

「うむ…早く先を見るぞ」

二日目

07:00―台所

『おはよう』

『さつさと飯食え』

『へいへい』

07:30―台所

『水に浸けとけよ』

『分かってるわよ』

先に食べ終えた少年が一言言ってから食卓を離れ別室に向かった。
ゆっくりと朝食を食べる樟葉は井が空になると脇に置いてある二つある炊飯器の中から可能な限り白米を井に移している。その間にも二皿目のサラダを食べている。

07:40―台所

『…味噌汁おいしー』

そんなことを言いながらまだ朝食を食べてる樟葉は井に味噌汁を入れて飲んでいた。

08:20―玄関

『何かあったら電話してなさいよ』

そんなことを言いながら私服に着替えた樟葉は外出してしまった。

「…二日目ですか」

「昨日より早く出てったね」

「何か嫌な予感がするんだが」

「さっさと早送りせい」

23:13―玄関

『ただいま』

その日も深夜に帰って来て、何事もなくシャワーを浴び、就寝した。

三日目

07:00―台所

『今日の朝、何？』

『いつも通りだ』

『えゝ、たまには違うもの作ろうよ』

『自分でやれ』

08:20―玄関

『シャンプーもう無いからから買ってきといて』

そんなことを言いながら私服に着替えた樟葉は外出してしまった。

「…これ以上見てももう無駄な気がします」

「…同感です」

「どうします、課長？」

「…諦めよう」

こうして樟葉の日常に関して、捜査第零課の面々は誰も口に出さなくなっ

料理は化学（毒物的な意味で）

樟葉宅にて

「久しぶりに料理をします」

「…何を作るつもりだ？」

「無難なところで焼きそばかな」

台所にて

「出来た！」

「ふうーん、盛り付け・色合いはいいな」

「でしょ？」

「味は（パクリ）…なあ」

「うん？」

「樟葉おまえは焼きそばを作ってたんだよな」

「そうだけど？」

「…もったいない」

捜査第零課にて

「てなわけで余ったので持ってきました」

「樟葉さんが料理を…」

「何か言いたげね、増田」

「いや、ちょっとイメージが出来なくて」

「なら今日から改めなさい、ところでミクさんは？」

「暴力団関係で調査に行ってる」

「じゃあしょうがないわね…男衆、食べてなさい」

「じゃあ遠慮なく」

「いただきます」

「…どう？美味しい？」

「…トイレに行つてきます」

警察署・トイレにて

「何ですかこれ！？」

「焼きそばの形をした兵器だな」

「まさか口に入れた瞬間に意識を刈り取られるとは思わなかったです」

「ああ、まだ吐気が治まらないぞ」

「僕もです」

亨の事務所にて

「はい、お裾分けよ」

「わざわざありがとうございます、樟葉さん」

「…だが残念なことに俺達はさっき飯を食ったばかりだ」

「えっ？亨さん、今から準備をはー」

「そんなわけで後で食うから帰れ」

「分かったわ、後で感想聞かせてよ」

亨の事務所にて

「よし雪奈。いまずぐそいつを棄てろ」

「でもせっかくつくつてきてもらいましたのに…」

「だからこそだ」

「…どういうことですか？」

「昔、アイツの料理を食べた同級生が泡吹いて倒れて病院に運ばれたんだ」

「…流石にもう何年も前のことですから改善されたのでは？」

「いや、無理だな」

「……？」

「アイツがそんな努力するとは思えん」

樟葉宅にて

「ただいま」

「おかえり」

「あゝお腹すいた。ねえ、晩御飯まだ？」
「もうちょっと待ってろ」

珈琲中毒

日比野兼次は困っていた。いつも冷蔵庫やポケットに入れているお気に入りの缶コーヒーが切れてしまったのだ。それだけなら買いに行けばいいのだが既に幾つものコンビニとスーパーを梯子しているのだが今日に限って全て品切れになっており一つも手に入らなかったのだ。わざわざ遠くに買いに行くには面倒だし明日には入荷しているだろうと思い、結局今日は不味いインスタントコーヒーで我慢することにした。

「…で、一週間経っても入荷しないうえに隣町にも無いから俺に原因を探って、買いに行けと？」

「…ああ」

後日、その銘柄だけ何故か入荷されないことに違和感と中毒症状を感じた日比野は自主欠勤して亨の所に来ていた。

「別の銘柄でも飲んでけよ」

「アレとは小学生からの付き合いなんだ。今更乗り替えられるか！」

「さいですか…とりあえず前金を寄越せ」

亨は呆れた表情をしながら立ち上がると日比野に向かって手を差し出す。

「幾らだ？」

「一万でいい」

迷うことなく諭吉を一枚渡した日比野は「良い結果を待ってる」と言うに出ていった。

「結論を言おう。アレは発売中止になった」

二日後、改めて亨の所に来た日比野の顔が絶望に染まった。亨はそれを確認して尚も話を続ける。

「しかし、今度はそー」

「うわあああああつ!?」

しかし日比野は最後まで聞かずに泣きながら走っていった。

日比野は走った。何処を走ったか全く思い出せないが休むことなく走り続けた。気が付けば見覚えのある裏路地にいた。そこは日比野にとっては忘れることの出来ない場所だった。

「ここの自販機…まだあったのか」

初めて缶コーヒーを買った自販機に硬貨を入れて、ラインナップを見る。しかし今まで缶コーヒーがあった場所は既に別の銘柄に変わっていた。

『別の銘柄でも飲んどけよ』

先程の亨の言葉が頭の中を反芻する。

「簡単に言うけど…アレは俺の生きる糧だったんだ」

「みみっちいヤツだな」

いつの間にか後ろにいた亨が日比野を無視して別の缶コーヒーを選ぶ。取り出し口からそれを取り「とりあえず飲め」と日比野に手渡す。

「だが…」

「いいから飲め」

有無を言わせない亨に日比野は仕方なくプルタブを開けて、口にする。

「…これは!？」

それは飲み慣れたコーヒーの味に似ていた。いや、全く同じように感じた。

「アレは発売中止になった。だが味はそのまま別銘柄で発売することになったそうだ」

「なんですかに言わなかった?」

その言葉に亨は呆れたように息を吐く。

「言う前にどっか行つたヤツが何言つてんだ」

「…すまん」

「全くだ。追加料金をもらいたいところだね」

「…本当にすまない」

「そう思うなら変なこだわりなんて捨ててしまえ」

「それは無理だ」

それを聞いた亨はまたも息を吐くと「やれやれ」と言いながら帰つて行つた。

一人取り残された日比野は苦笑いをしながら劉玄にどんな言い訳をしようか悩みながらスーパーに向かって歩きだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6909i/>

日常壺齋

2010年10月21日10時45分発行